

2
チーム名
大谷チルドレン

スタートアップは小豆島で 起業の島 『やってみま市』

小豆島では、行政が積極的に起業支援をしています。その結果、様々なスタートアップが生まれています。ですが、起業はハードルが高いです。そこで我々は、起業のハードルを少しだけ下げて「小豆島で起業のトライアルをする」という支援事業を考えました。それが「やってみま市」です。「やってみま市」は期間限定で無料出店できる行政支援サービスです。この支援では、オリーブなど「小豆島の名産品」を無償で利用することができます。ただしひとつだけルールがあります。それは、その名産品を使った商品を開発することです。



- プロジェクトメンバー**
- | | |
|------------------|--------|
| 芝浦工業大学デザイン工学部 2年 | 海老原 迅 |
| 芝浦工業大学デザイン工学部 2年 | 佐藤 大樹 |
| 芝浦工業大学デザイン工学部 2年 | 田村 梨乃 |
| 芝浦工業大学デザイン工学部 2年 | 中里見 雄大 |
| 香川大学創造工学部 1年 | 中村 実典 |

ポイント 「場所にとらわれない」ということ

「やってみま市」のポイントは「小豆島の名産品を考える機会をつくる」ことです。例えば博多ラーメンは全国にあります。そして、全国で博多ラーメンを食べることができます。こう考えると、「博多ラーメンを全国に展開することは、博多にとってマイナスな

では？」と思うかもしれません。ですが、博多ラーメンを知る場所が全国にある、つまり「全国で博多ラーメンのCMをしている」と考えることもできます。そして、旅行する時に「博多ラーメンの本場、博多に行こう」といった感じで、観光の動機づけにも繋がります。「やってみま市」の真の狙いはそこにあります。

やってみま市は「トライアル環境」を提供しますが、小豆島での起業を義務づけません。なぜなら「小豆島で、小豆島の素材を使って考案した」ものが、全国各地に分散し、それが「小豆島への呼び水になる」ことを狙っているからです。



感想 島の方々のあたたかさに学ぶ

このグループの原動力となったのは「島の方々のあたたかさ」です。フィールドワークで道に迷った私たちに、大谷さんという方が声をかけてくださり、お茶までいただきました。この出会いは班員全員にとって忘れられない思い出となり、自然とチーム名にもなりました。

プログラムでは棚田の稲刈りや地引き網体験、エンジェルロードなど小豆島ならではの自然を満喫しました。また地域の方の講義、オリーブ園や醤油蔵を訪問しました。これらのプログラムを通じて、小豆島の資源を活かさなければもったいないと感じました。

まずハードルの低さに惹かれ小豆島を知るキッカケに。そこから小豆島の良さに気づくことは、今回の私たちが証明済みです。

小豆島らしいけれど新しい名産品を、若者らしい発想と行動力で開発してほしい。そこから全国へ小豆島の魅力を伝えるサポーターになってほしい。そうした思いがこのプロジェクトに込められています。

(海老原 迅)